



## 関 谷 喜三郎

昭和25年10月20日生まれ

### 1. 略歴

- |          |                             |
|----------|-----------------------------|
| 1973年 3月 | 日本大学経済学部経済学科卒業              |
| 1975年 3月 | 日本大学大学院経済学研究科修士課程修了         |
| 1975年 4月 | 日本大学商学部助手                   |
| 1978年 3月 | 日本大学大学院商学研究科博士後期課程満期退学      |
| 1978年 4月 | 日本大学商学部専任講師                 |
| 1980年 6月 | 米国ラトガーズ大学客員研究員（～1982年 1月）   |
| 1984年 4月 | 日本大学商学部助教授                  |
| 1997年 4月 | 日本大学商学部教授                   |
| 1999年 9月 | 国家公務員Ⅱ種試験・試験専門委員（～2010年 8月） |
| 2003年 1月 | 商学部企画担当（～2003年 8月）          |
| 2005年 4月 | 日本大学大学院商学研究科教授              |
| 2007年 5月 | 商学部就職指導担当（～2013年 3月）        |
| 2011年 4月 | 日本消費経済学会会長（～2014年 3月）       |
| 2012年10月 | 商学部商学研究所長（～2015年 3月）        |
| 2021年 3月 | 日本大学定年退職                    |

## 2. 研究業績

### ①単著

『経済学はおもしろい』（日本マンパワー出版 1992年）

『ミクロ経済学』（創成社 2001年）

『消費需要と日本経済』（創成社 2019年）

### ②主な共著

『セミナーマクロ経済学入門』（税務経理協会 1994年）

『セミナーミクロ経済学入門』（税務経理協会 1995年）

『マクロ経済と金融』（慶応義塾大学出版会 2002年）

『金融と消費者』（慶応義塾大学出版会 2009年）

『マクロ経済分析』（慶応義塾大学出版会 2010年）

『マクロ経済学と貨幣』（八千代出版 2012年）

『経済学の歴史と思想』（創成社 2012年）

### ③主要論文

「新貨幣数量説の再検討」月刊金融ジャーナル 第17巻第4号 1976年

「ケインズ経済学の再検討とマネタリズム」日本大学経済学部経済科学研究所紀要第2号 1977年

「貨幣的要因と投資行動」田中稔教授還暦記念論文集『現代の貨幣経済』所収 八千代出版 1982年

「カレツキの所得決定に関する一考察」『商学集志』第53巻第3・4号 1984年

「マクロ経済分析とストック」『商学集志』第64巻第1・2・3号合併号 1994年

「不確実性と貨幣需要」『商学集志』第64巻第4号 1995年

「消費需要のストック分析」『政経研究』（日本大学法学会）第33巻第1号 1996年

「消費需要とマクロ経済」『商学集志』学部創設100周年記念号 2004年

「日本経済のマクロ分析」『現代経済分析』所収 創成社 2010年

「雇用形態と消費需要」日本消費経済学会『消費経済研究』第2号 2013年

「産業間の労働移動と賃金格差」『商学研究』（日本大学商学研究所）第31号 2015年

「マンデヴィルの消費経済論」『商学集志』第89巻第1号 2019年

### ④主な翻訳

V. チック『ケインズとケインジアンのマクロ経済学』（共訳）日本経済評論社 1990年  
ハジミカラキス『現代マネタリーエコノミクス』（共訳）多賀出版 1997年

ピアート『ジェヴォンズの経済学』（共訳）多賀出版 2006年

バイルス・ストーン『マクロ経済学』（監訳）成文堂 2009年

ピーター・クラーク『ケインズ 最も偉大な経済学者の生涯』（共訳）中央経済社 2017年

## 3. 学位

経済学修士

#### 4. 主要所属学会

日本経済政策学会（1975年～）、日本金融学会（1975年～）、日本消費経済学会（1993年～）

#### 5. 私の研究

大学院修士課程に在籍したときから研究活動がスタートする。当初はケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』にもとづいて、マクロ経済学の視点から貨幣と経済の関係を分析した。そこでの研究は、ケインズ経済学とマネタリズムの対比を中心としたものであった。次に、ポスト・ケインズ派経済学の立場から、ケインズ経済学を生産・貨幣・期待を取り扱う貨幣的生産経済の理論として再構成するための研究に従事した。

その後、ケインズ経済学に基礎を置きながら、日本経済のマクロ分析についての研究を進めた。とくに、消費需要の動向に焦点を当てながら、バブル崩壊後の日本経済の現状を分析していった。そこでは、有効需要としての消費の動きが経済変動を左右する状況を検討し、消費の安定が経済の安定にとって不可欠であり、そのためには雇用・賃金の安定が重要であることを解明しようとした。

さらに、消費経済分析の重要性を確認するために、経済学説史の世界に文献を求め、資本主義経済の発展と其中で消費が果たした役割についての考察を進めた。